

県立児童会館閉館後の利活用に係る外部専門家からの意見

ヒアリングの概要

- 1 実施時期 平成23年1月18日～25日
- 2 外部専門家（五十音順）

熊谷 慎之輔	岡山大学大学院准教授
黒瀬 定生	県生涯学習審議会会長、県公民館連合会会長
長江 真理子	NPO法人みる・あそぶ・そだつ津山子ども広場代表理事
中平 徹也	(財)岡山県環境保全事業団環境学習センターアスエコ所長
成本 智幸	県小学校長会会長(岡山市立芳泉小学校校長)
原田 勲	岡山大学名誉教授
松田 久	両備ホールディングス(株)代表取締役副社長
松畑 熙一	中国学園大学・中国短期大学学長
湊 照代	NPO法人ふれあいサポートちゃていず代表理事

主な意見の概要

- 1 活用策(案)全体について
新施設設置の根拠は、岡山県の生涯学習の現状や踏まえるべき社会情勢から考える必要がある。理科離れの解消や先進的なESDの取組の拡大に生涯学習の分野からアプローチする手法として、生涯学習センターの機能を活用するという考え方が自然である。
岡山県の課題や社会教育委員の会議の提言から、新施設の機能を考えてみるとよい。希薄化した人間関係の課題から、親と子のつながりや三世代のつながりを考える拠点としての役割を新施設がもつことは重要なことである。
子どもにとって、昔は、学校、家庭、地域の役割がはっきりしていた。今は、学校以外の地域での学習も重視されており、新施設でも、学校、家庭、地域のつながりを深めていくことが大切である。
- 2 目指すべき方向について
生涯学習センターに「少・壮・老」の三世代が集い、楽しく学習や交流をするという「三学ばる」の理念があり、その理念にも沿った機能の充実を図る案となっていてよい。
少年から青年、または、壮年から老年へ人の発達を縦にみていけるところが教育のよいところだ。知事部局の取組は、人の発達段階に応じて子どもの支援や高齢者への支援等、集中的に行っている。その取組を縦や横につなげていくことが、教育の働きになるのではないか。新施設は、全県的な利用が期待できる施設にすべきだ。そのためには、PRの必要性を感じる。
岡山駅西口一体の京山地域をアクティブカルチャーゾーンと位置付け、一体的に連携させていく構想もある。
施設を利用したいと要望している県民の方のニーズがどこにあるのか。それらのニーズも踏まえた検討としていく必要があるのではないか。
科学を中心にした学びを乳幼児から高齢者まで生涯にわたり学習できる施設になってほしい。他の施設では、所管の違いにより担当が変わり、不便なことがある。活用しやすいよう同一の所管で、いろいろな世代の方が学ぶことができることが望ましい。

3 基本的役割

科学を通じた知の発信について

県立の科学館を設置するという事になれば大賛成である。

新施設は、スペース的に狭く、科学をメインとしたコンセプトに絞って打ち出すべきである。

環境学習を進める上でも、科学的な基礎を学ぶ施設が必要と考える。

環境も含めた広い意味での科学教育の重要性を感じている。科学における思考方法は、どの分野においても大切だ。また、子どもが科学に興味をもつ段階のイベント的な事業を通じて、親も科学に触れる機会を提供することは大切である。

県の施設として、科学体験の核となる中心施設と、社会科学的な子どものための施設があるとよい。

企業の科学技術はすばらしく、学校ではほとんど目に触れない技術がたくさんある。岡山県の特色であるものづくりの基礎も科学によるものが多く、その技術を展示するのはよいと思う。それらを体験することが子どもたちの将来を決めるきっかけ、手立てとなる。企業サイドからも展示を希望すると思う。

吉備中央町のニューサイエンス館へは、子どもが遠足で行っていた。岡山市内にも科学体験ができる施設がほしい。

星を見て、宇宙を夢見るだけでは不十分であり、科学に結び付くような体験ができる施設にしてほしい。

子どもにとっても企業の科学技術展示は、岡山の産業を学ぶよい機会であると考えます。

学校では学べない科学技術を使った環境学習の方が、利用が見込めるかもしれない。科学と環境をともに学べる施設になれば珍しいのではないかと。

学校現場においては、環境教育など新しいものに関する出前講座へのニーズは多いと思う。

環境学習については、部局や教育委員会を問わず、横断的に取り組んでいく必要があると考えており、県民の環境に対するニーズを考えて、新しい施設を環境の学びの場としてもらえるとうれしい。

個人的には「環境循環型社会」という言葉が大切であると考えている。環境循環型社会を生きていくために科学や環境について知ることが必要であると考えている。

基本的な学びの場の提供や体験によって、環境に関する知識等を身に付けることは重要である。

親・子の学びの発信について

学びの成果を生かしたつながりの拠点として重要なことは、個人の要望と社会の要請のバランスを図っていくことである。県に期待したいことは、個人の学びよりも、社会の要請にウエイトを置いて、バランスをとる施策を行うことである。

学校で行っている環境教育とは違い、子どもが親に教える教育もある。子どもが学んだことを家庭で親が知るということも重要である。

子育て支援関係のNPOが、科学教育の振興に関係している例があるため、科学を中心とした学びの拠点で親子のつながりや世代間の交流を目指すことの可能性は十分ある。

子育て支援や家庭教育の分野は、地域に密着して行われている。新施設に拠点施設としての機能をもたせる必要はあまり感じない。

全ての子どもを対象とした施設にしてほしい。児童遊園もあるので、科学を中心にした学びや遊びを通して、親子が触れ合い、ともに育ち合える場になってほしい。

世代を超えたつながりの発信について

「世代を超えたつながり」は大切にしたい。あらゆる世代の人が、学ぶだけでなく、つながりの中で学びの成果を生かす参加型のコンセプトが大切である。

子どもだけでなく、親の世代の学びも大切であり、世代のつながりの機能を新施設にもたせることは大切なことである。

4 基本的機能

プラネタリウムのニーズについては、小学校の学年でいえば、4・5年生が対象となる。4・5年生なら、プラネタリウムと児童遊園での外遊びをセットにして、遊んで帰るという取組になると思う。また、5年生では総合学習で環境教育に取り組んでいる学校もあるので、環境教育のモデルとなるものを扱ってほしい。

今は、科学が注目されており、科学の視点から有効活用することに賛成である。できれば新施設にプラネタリウムは設置してほしい。

科学的要素を踏まえ、県施設として独自の機能をもたせる必要がある。

科学展示等については、常に最新の情報が提供できるシステムが必要である。

展示物の更新は、メーカー協力をしてもらえばいいのではないかな。

科学的な展示については、月ごとにテーマを決めて企画したらよいのではないかな。

科学を中心にしたとしても、フリースペースとして、子育て支援ができる場所を確保することはできないかな。

5 運営方針について

科学教室の受講生が、講師として活躍する能動的な教室の必要性を感じる。ともに学ぶという要素は、ぜひ取り入れてほしい。

科学を通じて親子が楽しめる取組を実践することは大切である。クイズや簡単な実験、科学カルタを使ったアプローチなど、科学への導入となるような事業の展開を期待する。

科学ボランティアの養成については、学校外で、自主的なイベントを実施している段階ではよいが、学校の支援に入る場合は、一定水準の指導力が求められるため、研修が必要になってくる。

人材養成は県に期待される機能の一つである。また、学んだことを実践に生かしていく必要があり、それを実現できる施設にできるとよい。

新施設の目指すべき方向がはっきりしない印象はある。基本的な方向は、「地域の創生の中でこの施設をどう生かすのか。」を考える必要があるのではないかな。京山地域創生協議会では、新施設を含む一帯の京山アクティブカルチャーゾーンをどのように創生していくか検討をしている。

この施設のドームを活用した映像のプロデュースを計画しており、ドーム映像を作製し、配給することを検討している。ドームの中で宇宙に関すること以外の映像も上映したい。また、全国的に珍しい取組である京山の太陽光発電や植物工場との連携の在り方を検討してほしい。

プレーパークは、クリエイティブな遊びをみんなでする場所だ。プレーパークの活動は、生涯学習センターの情報・創作棟と連携して取り組む必要がある。

小学生を校外学習で引率する場合、一日のプログラムとなるため、体験と遊びをセットで考える必要がある。

子どもは遊びが好きだ。遊びや生活の中の科学を学ぶ機能はどうか。普段の生活の中にある科学的な体験ができるコーナーも採り入れてはどうか。身近な生活の中の科学に気付かせたい。

子育て支援の分野では、地域に密着して活動することが重要である。県の役割としては、県広域のイベントの開催やネットワーク、人材養成が重要である。

新施設では、県民からの提案型のプログラムを提供していくことも考えられる。

6 管理方針

管理運営主体について

県の施設として新たな機能を考えていくとしても、県が全て実施すべきでなく、民間と連携した上で、県の役割を明確にしていく必要がある。

新施設では、科学分野でのコーディネート力をもつ人材が求められるため、生涯学習センターに、科学に堪能な人材の配置が必要である。

管理体制については、コンソーシアムが必要である。県の施設という性格から、実際に活動している複数の団体によるコンソーシアムでの運営が望ましい。

コンソーシアムを組む場合、リーダーとなる存在が必要である。特に、NPOはそれぞれの理念に基づいた活動を行っており、施設の活動を決定する場合の主体となる団体が必要になる。

子育て支援のネットワークは、既に構築されており、ネットワークでつながっているが、活動内容は様々であるため、拠点施設としての運営主体がどこになるかという問題が出てくることが予想される。また、新しいネットワークを構築するには、行政の支援が必要になる。

協働のスタイルとしては、責任関係の明確化も必要だ。新施設が完成する前に協働の団体を募集する形式も検討しておく必要があるのではないか。

常設展示を行うには、専門的知識等を有する専門職員の配置が不可欠である。

市町村、関係機関・団体等との連携・協働について

新施設での取組は、多様な主体の連携が必要であり、生涯学習センターがコーディネートできればよい。

子どもに科学的な実践力を身に付けさせるためには、行政と大学や民間が連携して取り組まなければならない。また、その取組は、楽しいイベント事業だけではいけない。学ぶ意欲をフォローする継続した取組が大切である。

様々な団体が、科学の出前講座により学校を支援する場合は、調整のための組織が必要だ。その組織を県が大学等と連携して構築していけるとよい。

科学教室の設備については、高価な設備が多いため、大学等の設備を活用したり、見学したりすればよく、その連携をコーディネートする仕組みが必要ではないか。

「かんきょうひろば」で活動したい人はたくさんいるので、その人たちが新施設で講師をすることも考えられる。

環境学習においても、様々な主体と協働する姿勢が大切である。

協働という観点から、県と複数のNPOがプロジェクトチームを組んで事業を行う必要性は感じている。県と複数のNPOがプロジェクトチームを組んで事業を行えば、大きな事業の展開が期待できる。

周辺施設との連携・協働について

周辺施設との連携は大賛成である。京山ロープウェー跡地に太陽光発電設備と併せて植物工場を建設する予定であるが、見学の説明スペースが少ないため、新施設で太陽光発電のセルや植物工場での取組を説明するという連携が考えられる。

岡山市のESDは全国区である。公民館を巻き込んでいるので、それらと連携する必要があるのではないか。

周辺施設との連携は必要なことであり、植物や動物などの自然学習を取り入れたらよいのではないかと。

アスエコでは、ボランティアやNPOを動かすために必要なノウハウの提供など新施設を支援することも十分に可能である。

観光的視点が必要ではないか。新施設の周辺にはいろいろな資源があるが、今は点として存在している。つながっていないことが大きな課題だと考えている。さらに、交通面から、西口から歩いて巡るコースやバスを利用した観光ルートづくりも必要だと考えている。

7 整備方針について

児童会館の今の設備は大変古いため、更新した方がよい。

児童会館は、校外学習や遠足で活用していたが、以前より学校の利用が少なくなったように感じる。原因は古くなって機能が失われたからではないだろうか。最新の魅力ある展示、体験ができる施設にすることにより、機能の回復を図れば学校利用も期待できる。

プラネタリウムを科学の体験施設として有効に活用してもらいたい。

現在の児童会館の展示物は陳腐化している。

新しい機能を付加していく際、手狭な駐車場が問題となる。ぜひ工夫して解決してほしい。新施設に期待することは、飲食する場の確保である。都会の公共施設は、食事のできる場所が必ずある。人を集めるという観点から必要ではないか。

螺旋階段は、小さい子どもにとっては、危険であると考えている。また、壁はシンプルなものがよい。

8 その他

生涯学習センターの業務が増えることになるため、今後、具体的な事業等の実施に必要な予算の確保が重要である。

子どものアイデアを募集してみても面白い。子どものアイデアを生かしたり、子どもが参加・参画する仕組みを取り入れてみたりしてはどうか。